（報告）

「対話スキル」の向上にむけて①
―愛媛県美術館作品ガイドスタッフの活動紹介―

鈴木　有紀

1.　はじめに

愛媛県美術館では２００５年度から対話型鑑賞法を専門に担う作品ガイドスタッフ（ボランティア）の育成を行い、活動を行っている。対話型鑑賞法を用いたギャラリートークは、周知のとおり、ナビゲイターと呼ばれる司会進行役の持つ「対話のスキル」に、途中経過も行き着く先も大きく左右される。本鑑賞法は「なんでもいいから思いつくことを話し合いましょう」と最初に鑑賞者に作品の感想を述べることを投げかけ、しかし最後は「美術にはいろんな見方がありますね」あるいは「作者はこういう気持ちでこの作品を作ったのです」といったまとめ方で終わるものとは似て異なる。この対話型鑑賞法では、ナビゲイターには本番に至るまでの周到な準備とともに実際にトークが始まってからは、作品に対して投げかけられる鑑賞者の発言をよく聴き、注意深く考え、次にその発言に対しどのような言葉を投げかけたら鑑賞者の新たな見方を引き出せるかを常に考え続ける「対話のスキル」が要求される。そしてこの「対話のスキル」の向上なしにはこの鑑賞法の目的とする、鑑賞者相互のコミュニケーション能力も鑑賞者と「アート」との関係も深まらず、つまりは鑑賞者の中に「学び」は起こらない。

しかし言うは易く、行うは難しである。この「対話スキル」の向上は一朝一夕には成り立たない。今回の報告では、まず当館の作品ガイドスタッフが対話型鑑賞法のギャラリートーク本番前後に行っている準備を中心に活動の様子を紹介するとともに、この６年を振り返り、現在そこから浮かび上がる課題点について述べる。

2.　作品ガイドスタッフの実践概要

(1)半年間の研修

ではまず、当館で実施している作品ガイドスタッフの実践概要から紹介する。先にも述べたが愛媛県美術館の作品ガイドスタッフの制度は２００５年４月からスタートした。スタッフの更新・募集は２年毎に行っており、現在１期生から３期生までの計３８名のスタッフが登録・活動を行っている。

募集の形態は年齢が１８歳以上であれば誰でも応募が出来(毎回１５～２０名程度の募集)、応募方法は現在のスタッフが活動しているトークに参加後、『対話型鑑賞法を体験しての感想文』（８００字程度、ワープロ可）と所定の応募用紙（履歴等が記入されたもの）を提出の上で選考を行っている。そうして選考後は、この作品ガイドスタッフ希望者は月１～２回程度の、約半年間に渡る研修を受講することになる。(資料1)

研修は、６年前に実施した１期生の時には館蔵品を中心とした美術史等の講義が半分、トークの実践練習が半分という内容であったが、次回の２期生の時からは殆ど実践練習を中心とし、対話型鑑賞法の概要を知ってもらうという位置付けの研修へと変更を行った。これは研修終了後、展示室にデビューした１期生から、トークの練習回数が少なかったため、実際の実施について不安の声が挙がったこと、また館蔵品についてのレクチャーは、常設展示の展示替ごとに行っている説明会に於いて実際に展示されている作品とじっくりと向き合いながら学んでいく方がよりトークに対しても、館蔵品に対しても理解が深まると考えたからである。

(2)コレクショントーク

こちらは基本的に常設展示室で毎日午後２時から１時間程度開催をしている館蔵品を使ってのトークである。先にも述べたが、スタッフは展示替ごとのレクチャーを

受講後、各自トークする作品を決定して準備に取り掛かる。(資料２)作品の選定についてはトークを始めて間もないスタッフに対しては、西洋画・洋画・日本美術・現代美術等の各ジャンルについて、各々の好みを超えてトークに取り組めるよう、また複数の作品に取り組む場合には、鑑賞者に対してその順序、選び方に配慮が伴うためアドバイスを行っている。ベテランのスタッフに対しては、各自に作品の選定を一任している。

（資料2・展示替レクチャー）

後にも述べるが、最近は少しずつ増えて来ているとはいえ、この「コレクショントーク」に参加する鑑賞者は人が大勢集まる「企画展トーク」と比べると、まだまだ少ない。館蔵品はその館の顔であり、また、一度で終わってしまう企画展に比べ、いつでも何度でもじっくりと繰り返し訪れることができるという、「みる」ことを楽しむためには最適の環境である。そのためにもこの館蔵品を活用したトークについては、今後何らかの打開策を検討したいと考えている。

(2)－①　模擬トーク

模擬トークは月２回程度、通常のコレクショントークの枠内で行っているスタッフの練習トークである。このトークでは、他の作品ガイドスタッフメンバーを鑑賞者に見立て（しかし、コレクショントーク枠内で実施するため、本当の鑑賞者が参加していることも多々あるが）スタッフの対話スキルの向上と、館蔵品に対する理解を目的としている。

模擬トークの順番は基本的に名簿順に行っているが、その他のトークの様子を見て、もう少し練習を重ねるとスキルが向上すると思われるスタッフには特に集中的に参加してもらっている。

(3)企画展トーク

企画展トークは、当館で年間５～６本程度開催される各企画展の中から、作品の性格や展示室の環境等に配慮して、展覧会会期中の毎週土曜か日曜のいずれか（午前中の３０分程度）に開催されるトークである。

この企画展トークの実施（その年、どの展覧会でトークを行うか）については年度当初のガイドスタッフのミーティングで、担当学芸員からスタッフに伝えている。愛媛県美術館では、この“トークを開催する展覧会”及び、“どの作品でトークを行うか”については、展覧会の性格や趣旨に配慮する必要性から、学芸員の方で決めている。

公式なトークの準備は各展覧会が開催される約１ヶ月半前から始まる。展覧会の内容によっては半年前から開始する場合もあるが、ほぼ毎回１ヶ月半前より開始している。手順としては、まず①展覧会の内容及びトーク作品に関するレクチャーを行い、同日、トークを担当する各作品ごとに、主担当（1 名）とサブ担当（３～５名）のグループを編成する。(資料３)

この主担当、サブ担当はお互いの都合に応じて適宜、交代が出来る状態になっており、後にも述べる「スクールトーク」では、このグループ編成が力を発揮する。

（資料3・企画展レクチャーの様子）

そうして次に②、各グループごとに、本番トーク前の模擬練習を行う日を決定した上で、主担当になった

スタッフはトークの準備に取り掛かり、サブ担当となったスタッフもまた自らのトークの準備とともに、主担当のスタッフのトークの準備について補佐・協力を行う。

この「企画展トーク」は先に述べた「コレクショントーク」と違い、グループワークのスタイルをとっている。しかし、実のところ最初からそうだったわけではなく、活動を重ねる中で、自然発生的にスタッフ間で出来上がってきたものである。（資料４）

（資料４・企画展トークの様子。上は「ピカソと 20 世紀の巨匠たち展」下は「円空・木喰展」開催時のもの）

（3）－①　ワークシートを使っての１対１のトーク

このトークも「企画展トーク」のひとつであるが、こちらは毎年夏休みの企画展と連動して行われるトークである。（スタッフの準備等はほぼ同じである）

ここでは『指令書』と呼ばれるワークシート状の鑑賞ツールをもとに、鑑賞者とスタッフが展示作品についての「対話」をとおして、「みる」ことの面白さを共有していく。他のトークと違う点は「対話」の仕方が、ほぼ１対１であること、ワークシートを「対話」のきっかけに使うことの２点である。このトークの詳細については昨年度の実践報告 (1) を参照されたい。１対１の「対話」ということで、鑑賞者それぞれの年齢・発達に応じた言葉の遣い方、話のタイミング等、普段のトークよりもより、スタッフ側の経験と工夫が試されるが、鑑賞者との「対話」という意味において、スタッフ個々人の持つスキルが非常に鍛えられるものとなっている。（資料５）

（資料５・ワークシートをきっかけにしての１対１のトークの様子）

（4）スクールトーク

館内に学校団体が１時間以上滞在予定の際に行っているトークである（学校からの申し込みはスタッフの準備・調整のため実施の２週間前を期限としている）。約 10～15 名の児童・生徒にスタッフが一人付いて、約 30 分間で１～２点の作品をじっくりとみた後、自由見学というスタイルをとっている。

トークの対象となる作品は、企画展開催時には先ほ

ど述べた「企画展トーク」で選ばれた作品となる。また、「企画展トーク」は担当作品が一人のスタッフ（主担当）のみに任されているのではなく、グループで担当しているため、こういったスクールトークの場では、他の多くのスタッフの腕磨きの良い機会になっている。（資料６）

（資料6・企画展「畦地梅太郎展」でのスクールトークの様子。上下とも）

（4）－①　出前トーク

学校現場や病院等に直接出かけ、作品映像を用いて行うトークである。現在は、試みの段階で、活動実績は少ないのが現状である。しかしながら今後、活動形態を整理して学校への広報等を行っていきたいと考えている。

（4）—②　学校教諭への研修時のトーク

昨年度から試みているトークであるが、こちらは夏休み等を利用して、「対話型鑑賞法」を学びたいという先生方の研修内で、スタッフがデモンストレーションとして行うトークである。トークでは、先生のグループに混じって他のスタッフも鑑賞者として参加し、その後の反省会にも参加する。トークの失敗も成功も含めて、お互いに学びとなるトークとなっている。（資料７）

（資料7・研修の最後には、受講者である先生自らがナビゲイターに挑戦する）

（5）振り返り（反省会）

以上が、作品ガイドスタッフが携わっているギャラリートークの概要である。そしてそのどれものトークの後に毎回、「振り返り」のための反省会を３０分程度実施している。具体的に述べると、その日のナビゲイターが、まずトークを終えての感想を述べた後、他のスタッフから「今日のトークで良かったところ、またこうすればもっと良くなると思うこと」をお互いに話し合うようにしている。これは、「あなたのトークの〇〇が悪い」といったような非難の場ではなく、次に向けての批判の場として位置づけている。しかし時によっては担当学芸員にとってもスタッフにとってもお互いに重い反省会の日もある。お互いへの思い遣りを一番にこれからも続けていきたいと考えている。

３．　トークの準備

では、現在当館の作品ガイドスタッフがギャラリートークの本番前にどのような準備を進めているかについて紹介する。次に紹介する冊子『本番までの準備の進め方』は、作品ガイドの制度が始まってから４年目に作成した。実際に鑑賞者を目の前にしての、トークの基本的な進行手順については、これまでも国内の多くの文献等 [2] で

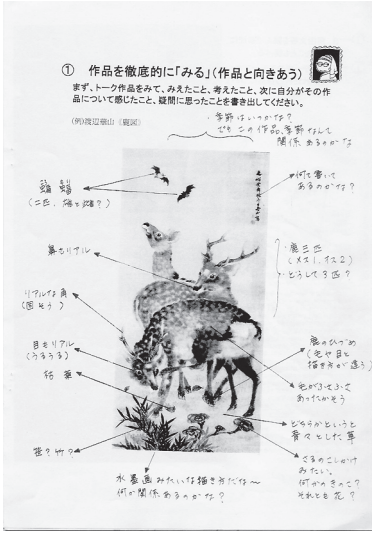
紹介されており、また研修内でも繰り返し伝えて来た。しかしトークの準備についてはやはり個人差があることがそれまでの実践とスタッフとの度重なる話し合いからわかってきた。このような理由からスタッフに対し、トーク本番前の基本的な準備について具体的なイメージを持ってもらうために簡単なアドバイス冊子を作成した。（資料８）

（資料8・「本番までの準備の進め方」表紙）

（1）作品そのものを隅々まで観察する。

それでは冊子の概要について紹介する。事例として載っている作品は江戸時代の軸であるが、その他のジャンルの作品であっても基本的な手順は同じである。

準備の手順は大きく３つに分けて記載している。まず、一番目では作品の情報（作家、時代背景、素材等々）は一切見ない状態で、トークを行う作品の隅々まで何が描かれているか書き出すよう（言葉化するよう）にしている。また最近では、この「何が描かれているか」について、例えばこの作品を一度も見たことのない遠方の友人・親戚に手紙で作品のことがきちんと伝わるような書き出し方をするように伝えている。この「見ていない相手にイメージできるよう言葉を綴る」方法は、簡単なようでいてなかなかに難しい作業である。しかし、作品に描かれているものをただ漠然と言葉に変換して行くのと違い、より作品と向き合うことの出来る大切な作業である。



（資料9・手順①作品を隅々まで観察する）

（1）ー①作品の情報を調べる

次の作業も作品に関する準備になるが、ここでは作品に関するあらゆる情報（作家に関するものから、そこから派生する雑学的な知識まで全て）について、自分が気に掛かる事は全て、力の及ぶ限り調べ上げるように伝えている。（資料１０）

（資料10・手順①―1疑問に思うことはどこまでも調べる）

冒頭でも述べたが、対話型鑑賞法は鑑賞者の思いつきを述べる作品鑑賞ではない。トークの途中で、鑑賞者が作品に対して何らかの気づきを得、言葉を発した場合は、その意味するところを捉え、それが作品に関する何らかの事実に触れる場合は、的確なタイミングで情報を提供

し、鑑賞者の学びの後押しをしなければならない。また、その後押しは単なる情報の提供に留まらない。そのためには準備段階で本番の様子を想定して、ナビゲイター自身が気になる作品に関わる情報については出来るだけ考えられる限りの準備を行うよう伝えている。

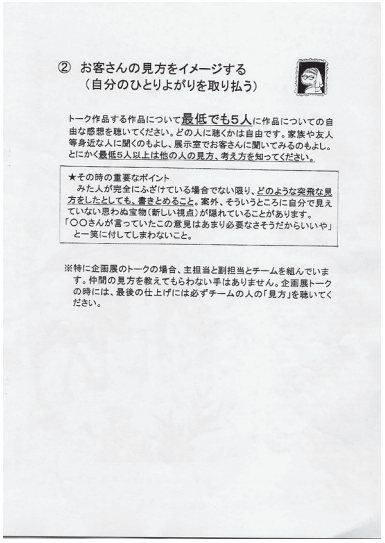
（1）　来館者調査を行う

その次に行うのは、今度は実際の鑑賞者の作品の見方をイメージするための「来館者調査」である。（資料１１）

これまで紹介して来た準備作業は極端に言えば、ナビゲイター自身でなんとか進められる作業である。しかしこの「自分だけ」で進めて行く作業には時として「ひとりよがり」という落とし穴が待っている場合がある。つまり、「自分の見方」がその作品に対する全てと錯覚してしまうのである。これではトーク本番中、ともすれば自分の見方に誘導してしまいがちになり、また鑑賞者の言葉を聴くことも出来なくなる。

ここでは、その危険を回避するため、またナビゲイター自身の作品に対する理解をより深めるため、本番前に一般の鑑賞者に（作品に関する情報は何もないままで）作品を見てもらい、どのような感想を持つか、そして何故そのような感想も持ったのかを事前に調べるように伝えている。

具体的にはトークを行う作品について、最低でも５人の一般の鑑賞者に作品についての自由な感想を述べてもらい、ナビゲイター自身以外の鑑賞者の作品の見方、考え方について知ることを伝えている。（どの人に聴くのかは自由にしている）更にそのインタビューの時の大事なポイントとして、鑑賞者側が完全にふざけている場合を除いて、鑑賞者が作品に関してどのような突飛な見方をしたとしてもそれを書き留めること、案外そういう箇所にナビゲイター自身が見えていない作品に関する新しい視点が隠れていることがあること、決して「〇〇さんが言っていたあの意見はあまり必要なさそう」等と一笑に付してしまわないこと等を伝えている。そして最後に、例えば「企画展トーク」等でトークの準備を行う場合などは特に、主担当とサブ担当でチームを組んでいるため、同じメンバーの見方を教えてもらわない手はないため、仲間の協力を得るように伝えている。



② お客さんの見方をイメージする
（自分のひとりよがりを取り払う）

トーク作品する作品について最低でも5人に作品についての自由な感想を聴いてください。どの人に聴くかは自由です。家族や友人等身近な人に聞くのもよし。展示室でお客さんに聞いてみるのもよし。とにかく最低5人以上は他の人の見方、考え方を知ってください。

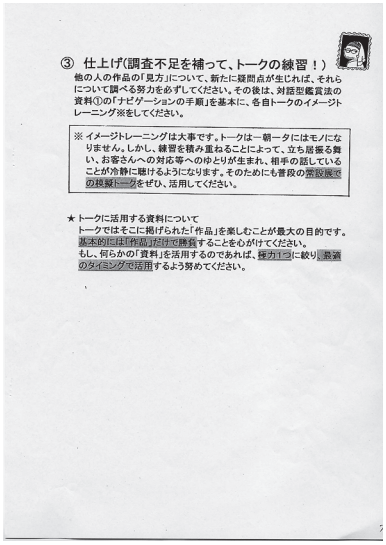
★その時の重要なポイント
みた人が完全にふざけている場合でない限り、どのような突飛な見方をしたとしても、書きとめること。案外、そういうところに自分で見えていない思わぬ宝物（新しい視点）が隠れていることがあります。
「〇〇さんが言っていたこの意見はあまり必要なさそうだからいいや」と一笑に付してしまわないこと。

※特に企画展のトークの場合、主担当と副担当とチームを組んでいます。仲間の見方を教えてもらわない手はありません。企画展トークの時には、最後の仕上げには必ずチームの人の「見方」を聴いてください。

（資料11・手順②鑑賞者の見方をイメージする）

（2）再び調整を行う

そうして最後の仕上げは、来館者調査で再び浮かび上がった作品に関する調査不足の補足と、本番に向けてのイメージトレーニングである（資料１２）



③ 仕上げ(調査不足を補って、トークの練習！)

他の人の作品の「見方」について、新たに疑問点が生じれば、それらについて調べる努力を必ずしてください。その後は、対話型鑑賞法の資料①の「ナビゲーションの手順」を基本に、各自トークのイメージトレーニング※をしてください。

※ イメージトレーニングは大事です。トークは一朝一夕にはモノになりません。しかし、練習を積み重ねることによって、立ち居振る舞い、お客さんへの対応等への ゆとりが生まれ、相手の話していることが冷静に聴けるようになります。そのためにも普段の常設展示の鑑賞トークをぜひ、活用してください。

★ トークに活用する資料について
トークではそこに掲げられた「作品」を楽しむことが最大の目的です。基本的には「作品」だけで勝負することを心がけてください。
もし、何らかの「資料」を活用するのであれば、極力1つに絞り、鑑賞のタイミングで活用するよう努めてください。

（資料12・手順③調査不足を補い、イメージトレーニングを行う）

特にここでは、参考文献や諸々の調査から受け売り状態になっている作品に関する知識を、実際に鑑賞者から聴いた感想の言葉と照らし合わせて、自分の言葉に置き換えることが大切である。これを作品ガイドスタッフの間では「知識を知恵に変える」と呼び、本番前の最も大

切な仕上げとして行っている。

4. スタッフの振り返りから

次に作品ガイド１期生である６名のスタッフの方々に、この６年間の活動を振り返っての、トークへの準備等も含めた率直な感想を述べてもらった。(感想の構成は自由形態とした）スタッフの感想からは現在作品ガイドスタッフが抱えている対話型鑑賞法によるギャラリートークへの課題が浮かびあがってくる。

また★印のスタッフについては平成１８年度文化庁文化庁芸術拠点形成事業報告 (3) 中で、スタッフとして１年目の感想を述べている。６年を経てのその変化の様子についても合わせて参照いただきたい。

（1）対話型鑑賞法に携わって（S.S さん）

①良かったこと

とにかくいろいろな人に出会って、いろんな見方、考え方に接して自分では見出せない、感じとれない「何かを発見する」喜びが得られるということでしょうか。アートはいろいろなメッセージを発していると思われますが、それを感じ取りまた見つけることがどんなにうれしいことか。私はトークを担当する時、事前準備として担当作品を何日か、何回か美術館に見に来ます。その度に何か違ったことを感じたり見つけたりします。それは何か大袈裟に言えば新大陸を発見したような喜びを感じます。またそれよりもうれしいのはトークの時、来館者からまったく違った観点からその作品を見せつけられた時、もう目の前がぱっとなりますね。

コレクショントークの担当の時は、通常来館者も少なく１：１のトークになってしまいます。そうすると怖がって逃げていってしまう来館者がほとんどです。その時、普通の言葉でいろいろな角度からその作品を取らえ、来館者をトークの中へ自然に溶け込んで行ってもらえるよう努力します。そうすると来館者もだんだん慣れて、思ったこと、心に浮かんだことをおずおずと話してくれるようになります。そんな時は対話型鑑賞法を通じたその人との出会いに感謝したくなりますね。

②これから改善すべきこと

トークの時、せっかく来館者が良い視点でその作品を見てくれた時、ナビゲイターの理解不足、突っ込み不足でそれを受け流してしまった時。後で考えてそういう意味だったのか、それならこういう風に言い換えて対話を広げてゆけば、皆と共感できたのにと反省することしきりとなってしまいます。

また逆に下手に勉強し過ぎるとトークの流れが詰まった時、つい作者の意図を考えてその方向にトークを誘導したり、解説したりしてしまうことがあり注意しています。そうならないためにはとにかくいろいろと言葉を換えて来館者の想像力を刺激し、トークがスムースに流れていくように努力しています。来館者に何かを投げかけて考えてもらうことは重要ですが、それをきちんと受け止めることが出来るかどうか。つまり例えば一つの場面を見てまったく正反対の見方が出ることが結構あります。この時は特に注意が必要で、それは全く同じ意味―嫌よ嫌よも好きのうちといったような･･･のことがあるわけで、それぞれの言葉の中に潜む共通項を探り出して来館者のすべてと共感できるようになれば理想でしょう。そうできるためにはもう場数を踏むしかないのではと思って経験を積んでいるところです。

（2）6年を振り返って（S.S さん）★

ボランティアを始めた頃は話がとぎれないように、という気持ちが先に先に立っていた。そのため自分の想いが前に出てしまう展開になることがあった。しかし、ひたすらただ傾聴することによって対話型鑑賞法が成立するということが理解できるようになって、ある意味楽になり、それと同時に別の難しさを感じるようになって来ている。

ナビゲイターがナビゲイトするために選ぶ言葉、投げかけ方によって、かなり展開は違ってくる。そこに個性が表れると同時に、ギャラリー全体の充足感をどの程度満たすことができるかの成否もかかっているように感じる。私自身は回数の上でも十分な経験を重ねることが出来ていないが、ボランティア仲間の成長は

強く感じている。私の思いも及ばないような発想、展開をされる方があり、自分自身の常識的な方向に流れやすい発想を反省はするのだが･･･、これも個性の一面として許してもらいたいと思っている。

何はともあれ、ボランティア仲間とのふれあいがとても楽しい。そして来館者の皆さんとの対話が面白い。皆さんに助けられ、私の感性も私なりに少しは豊かになって来ていると思っている。そしてこの活動を続けられることに感謝している。

(3)ガイドボランティアの6年を振り返って(K.N さん)★

ガイドボランティアとして研修、模擬トーク、スクールトーク、企画展トーク、夏休みのワークシートトーク等に参加し少しずつこの活動の楽しさ、難しさ、やりがいが分かってきた。また最近、肩の力が入らなくなったようです。この6年間を振り返ると具体的には次のような事が浮かびあがってきます。

①トークの準備

ア.　企画展トーク

企画展ごとにレクチャーを受け、下調べ、資料探しをしてきた。過去の資料もファイルして置いている。ただ資料等で得た情報の掘り下げが十分ない。反省。

イ.　コレクショントーク

展示作品の数が多く、作品・作者の調べ等は一応してファイルにしているが、どうしても広く浅くとなっている。

このトークの準備については、始めのうちはがむしゃらに調べ、資料を作成していたが現在は中だるみ気味です。また、作品作者等を深く調べていると対話の中で自分の描いたストーリーに誘導する傾向がいまだにある。

②　模擬トーク

子どもの時から国語が苦手、その上、小説などを読むことが少なかった。それが原因かまたは勉強不足なのか語彙が少なく、そのため表現の幅が狭かった。模擬トークに参加することで言葉の表現が参考になっている。また反省会で他のスタッフからのアドバイス、参考意見、ナビゲイターを担当する自分自身に対しての発言などが参考になってきた。それらの積み重ねにより、トークに参加することで自分自身が変化、他の人の話を聴く事により絵の見方、感じ方が変化することを実感することが多くなってきている。

また、最近模擬トークの参加者の発言が上手になってきた。しかしその一方で、難しい表現をするようにもなっている※。１期生の時は手探りで苦労したが、２期・３期の方は短期間でトークが上手に出来、発言も多くすばらしい。

(※模擬トークで最近気になる事)

模擬トークの中で作者の内面的な表現を追及するような発言が多く出ている。一般の来館者との対話の時にそこまで必要なのか。また、それで良いのか。

③ 活動の喜び

ア. トークが楽しく終わった時の来館者の反応

・今までの絵の見方が変わった。
・他の人のお話を聴いていると、自分が思っていたことと同じとか、自分と違った様に見ている人もいるんだ等、色々な見方があることがわかった。
・絵は自分なりに感動すれば良いことがわかった。
・良い時に美術館に来た。楽しく絵を見る事ができた。
・おかげで今後は気軽に絵を見ることができます。また美術館に来ます。
・トークへのリピーターも時々来館されていること

このようなお話を多く聴くことができ、達成感を得ることが多くなってきた。しかし参加者が少ない時には、はじめてから暫くは対話する事が出来ているが、どうしても説明的になってしまうことがある。また最近、模擬トークでも、コレクショントークの時でも作品選びに迷いが出てきて

いる。

④ 今後目指したいもの

ア．　絵画の原点はどういうものか、もう一度確認する

・（例えば）何かを人に伝える手段とか・・・ガイドの役割が分かるかな？

イ．難しいことではなく、その絵を見てその人が感じることがあればそれで良いと思う。そういうトークができたらいいなー。

・（例えば）音―音楽を含めて、聴こえてくる音。におい―絵の画面よりただようにおい。空気、風、風景、見ている人の感動。

ウ．　ジャンルによる得意・不得意を無くする様にしたい。かなりの努力が必要。特に日本画。

⑤　おわりに

この対話型鑑賞法を行っていると、発言内容が自分の過去に経験し、感動したことを記憶の中より思い出して発言する時がある。この記憶に残っているという事は、過去に感動したこと、悲しかったこと、嬉しかったこと等が絵を見ることにより甦る事によるものでしょう。

子ども達は美術館に来て、楽しく絵を見ること、話をすることで将来の一つの土台になればと思います。今すぐ目に見える変化でなくても長い時間をかけて美術館に親しんでもらう種蒔きになればと思います。

来館者が絵を見ることは特別なことではなく、日常生活の一部として取り入れ、楽しんでもらう場所になれば良いと思います。

（4）この6年を振り返って（H.N さん）★

①トーク本番前の準備作業

ア．インターネットや文献から調べる

a．作者について

1）年齢・性別・家族構成や生い立ち・時代背景

2）制作活動を始めた動機・きっかけ

3）影響を受けた作家・師・仲間

4）作品の変遷

5）好きなもの・嫌いなもの

イ．作品について

1）テーマ・モチーフ・モデル

2）時代背景

3）技法・画材

4）製作当時に作者のおかれていた環境

5）製作動機(発注者の有無や出品・展示先)

②作品から調べること

ア．モチーフ・モデル・タッチ・マチエール・色

何(誰)がどのように描かれているか客観的に観てみる

イ．描かれている物から受ける印象

主観的に観てみる(観る度に印象が変わる場合もある)そして、来館者の印象・感想も聞いてみる

ウ．他に出品作があれば関連・対比

以上に加え、作者本人の言葉やエピソード・批評家の評論などを調べて、作品との関連をまとめておきます。また、出品作以外の作品が観られる場合は、できる限り観るようにしています。

大体こんな感じですが、作品・作家によって多少変わるのと時間が無くてポイントだけになる事も多々あります。※インターネットの情報は、不確実なものや偏ったものもあるためウラが取れるまでは参考程度にするよう心掛けています。

③活動を振り返って

もう６年も経ったのかという感じで、企画展トークをやり切った時の達成感や、鑑賞者からの目からウロコの発言を毎回楽しみにしながらやってきました。非日常的な体験が出来るのが魅力なのかなと思います。

特に夏休み恒例のたんけんはっけんシリーズ（ワークシートによる１対１のトーク）では、たくさんの子どもたちの元気な姿や笑顔が見られるのがとても楽しみです。(自分の子はそういう時期を過ぎてしまったので・・・)

普段あまり自己主張をすることがない子なのでしょうが、親の「この子にはまだ無理だから」と言う心配をよそに一生懸命自分の考えを伝えてくれた子が何

人もいました。その時の親の驚いた顔と子どもの笑顔は忘れられません。今後も来館者が少しでも心に残るような活動ができたらなと思います。

(5)トークをしていて思うこと(Y.M さん)

ガイドボランティアを始めて絵の見方が変わった。ひとりでいろいろ発見したり頭の中で質問したりしている。そしてたまらなくしゃべりたくなったり、他の人の意見も聴きたくなる。美術館でも、本などで見る絵も同じ。

対話型では他の人の言葉で発見することがとても多く面白い。ぜひ多くの人に体験して欲しい。絵は静かに見るもの、と思っている人にこんな見方もあると知ってもらいたい。

自分が中心でトークしている時、「こんな方向にいったらいいな」とか「こんな意見が出るだろう」などと思っていてそうなったことがない。まさにナマ物。最後にある日のトーク後の私の感想です。

「準備や緊張感など、トーク本番の日までのプレッシャーは並ではなく、この日まではと我慢していることもあり、こんなにしてまで･･･との想いもある」

(6) ガイドボランティア第二話(A.Y さん)★

絵が輝き出す一瞬がある。相手は一生懸命言葉を探している子ども達の時もあれば、おじさんの時もある。そういう時はトークをしている自分が消える。相手の声に耳を傾け、共有する楽しさや驚き―作品の中の春風だったり、時にはタイムスリップしたり、又ある時は軽やかな音だったりと･･･。そして何度挑戦しても二度と同じ様に繰り返す事のないフレッシュ感。つくづくアートの持つ底力と鑑賞者との一期一会を楽しむ。

最近は困った事に、模擬トークに夢中になって度々手を挙げて発言してしまう自分がいる。熱を冷ました言葉にと思いながら、思いが先走りして何を言っているのやら。そんな時、ナビゲイターが言葉を整理して作品に返してくれる。ますます面白くなる。皆すごいな！

何年か前にもうトークを辞めてしまいたいと思ったことがある。でもあの時、辞めなくて良かったと思う。今思い出しても恥ずかしいが、呆れず待っていてくれた美術館に感謝している。(味わった失敗は) 知識不足によるものだったのだが、この「知識」が曲者で、奥深さも広さも必要とする。作者の人生から、歴史はもちろん、背景、ファッション、色、タッチと多岐にわたる。

自分でも笑ってしまうが、最近、彫刻作品で模擬トークをするスタッフが多いので、彫刻の足の指にはまってしまった。いろいろなジャンルの作品のトークに出逢う度にますます作品をみることが面白くなる。

自分自身でトークを担当する時は、トーク本番前には身近な人に作品を見てもらっているが、自分以外の人の見方には自分では気がつかなかった事が多く、いつもびっくりしている。こんな風に不思議を沢山見つけ、調べ、自分の知恵にしてアートに近づきたいと願っている。

またこのトークは、例えば仲間どうしで同じ作品を同じ様に調べてトークしても、ナビゲイターの経験というか、それぞれの人生が映し出されるトークとなって、十人十色でとても面白い。自発的に問題点を見つけ、解決するために努力している仲間に勇気付けられ、うれしくなる。それほどこのギャラリートークは魅力的なものだ。

話がまた「知識」に帰るが、知識とはやっかいなもので、使うテクニックとタイミングが必要となる。使っていなければすぐにカンが鈍る。手に入れた様に見えても消えてしまう。日々精進しなくてはならない、なんと手に入れにくいものか！

ただ最近気になっている事がある（他のスタッフも模擬トークで話されていたが･･･。言葉は違っているかもしれないが内容は同じである）それは、ナビゲイターが知識で作品を見ている、と時々思う事がある。そういったトークはそつなくこなせてはいるが、初めてトークに参加される方との間に開きがあるのではないかと思う。何よりそういうトークは

面白くない。このトークの本当の面白さは閃きだったり、広がりだったり、鑑賞者のプラスαの不思議な何かを言葉にする事で心のどこかにあるものを目覚ましてくれる。あの感動を体験してもらう事ではないかと思う。テクニックではなく、素直に物事を見る感性を養っていきたい。

どこかの館長さんが言っていた。

「まずは、アートは好きか嫌いか、心に響くかどうかが大切。知識や情報の鎧に身を固めて勉強に行くものではなく、真っ白な気持ちで作品に向き合ってほしいです」

トークをするほど、この「真っ白な気持ち」を大切に、鑑賞者とともに見て、色々に感じる様、楽しみたいと思っています。･･･理想ですが（笑）

5. 今後の課題―「聴く」スキルの向上を目指して

最後に今後、当館が取り組むべきトークの課題を述べて本報告の締めくくりとしたい。

（1）現在活動中の１～3期生に対して

現在活動を行っているガイドスタッフを観察していると、トークの面白い、あるいはだんだんと面白くなって来るナビゲイターと、逆に作品に関する情報の準備も良く成され、鑑賞者に対する立ち居振る舞いもナビゲイターとして申し分ないと思われるのに、あとひと押し何かが足りないナビゲイターがいる。実はこの両者の差は、相手（鑑賞者）の話を聴けているか、あるいは聴こうとしているか、ということに他ならない。このことは第４章の中で１期生のスタッフからも指摘されているが、鑑賞者の言葉を聴きとることに戸惑いを見せる（或いは怖がる）ナビゲイターのトークに共通して見られるのは、極端に言えば①作品に関する知識（情報）を意識し過ぎるために、鑑賞者の声が聴けなくなるものと、また②トークが始まる前からナビゲイターの中で「今日はこういう展開のトークにしよう（最後を作者の気持ちでトークを締めくくろうとするのもこれに当たる）」という、予定調和的な道筋を付け、結果、そこから外れて行く鑑賞者の声を全く受け入れなくなるもの（ナビゲイターが事前に想定した展開になることは、本番では稀である）、そして最後に③自分のトークへの気負いが大きくなり過ぎて、鑑賞者のことが見えなくなるもの、の３点が挙げられる。そしてこれは、突き詰めれば「鑑賞者の考えを本当には認めてない（面白いと思わない）」「鑑賞者の言葉から学ぼうとしていない」―つまりは相手の言葉を「聴けていない」ということになる。そして逆にトークの面白いナビゲイターに共通するのは、「鑑賞者の言葉から常に学ぼうとしている」ということである。そういったナビゲイターは自らが、鑑賞者としてもナビゲイターとしても、「豊かな学び」を経験しており（このことをスタッフは“目から鱗状態”という言葉でよく表現している）、結果、そういった体験がモチベーションとなって、その後のトークの継続―スキルアップにつながっている。

この“目から鱗”の体験は、人によってその時期もきっかけもそれぞれに違う。けれども、出来るだけ多くのスタッフにこの「豊かな学び」を経験して欲しいという想いから、スタッフにはこれまで多くのトークの実践に挑戦してもらって来た。しかし、この６年間の実践によって、トークのスキルが格段に伸びて行くメンバーがいる一方で、ただがむしゃらにトークの経験を増やすだけでは、この鑑賞者の言葉を「聴く」スキルはなかなか向上せず、スタッフ全員のトークの質も上がらないことがわかって来た。今後はこの「聴く」スキルの向上に向けて、これまで行ってきたトークの準備等について再度点検・検討を行い、その上で改善・実践に臨みたいと考えている。

（2）平成23年度募集の4期生に対して

冒頭でも述べたが、この作品ガイドスタッフの更新・募集は２年毎となっており、来年―平成２３年度の４月より、新に第４期の作品ガイドスタッフを迎え、研修を実施することになる。この新期スタッフの研修については、これまで展示室での実践を中心に、出来るだけ直にトークの現場の空気が感じ取れるようカリキュラムの準備を行って来たが、こちらについても、これまでどおり実践中心の研修内容としながらも、同時に「鑑賞者から学ぼうとする姿勢」を育むために、この「聴く」スキルの重要性について細やかな配慮を行うカリキュラムを準備する必要があると考えている。

次回の報告では、この「聴く」スキルを向上を目指すための先行実践・研究も含めて、その後の当館での取り組みについて報告を行う。作品ガイドスタッフのメンバー全員とともに、更なる「対話スキル」の向上にむけて励みたいと思っている。

註

（1）拙稿「「対話」に基づくワークシートプログラムの改善と実践について（報告）」『愛媛県美術館研究紀要』第８号（2009、愛媛県美術館）

（2）京都造形芸術大学芸術表現アートプロデュース学科芸術表現演習Ⅰ（１回生の必修授業）での資料、または上野行一監修『まなざしの共有―アメリア・アレナスの鑑賞教育に学ぶ』（2001、淡交社）等

（3）ワークシート開発委員会編『平成 18 年度文化庁芸術拠点形成事業博物館教育シンポジウム　ともに見る、ともに学ぶ　利用者との対話からはじまるプログラム～ワークシートを中心に（報告書）』（2007、愛媛県美術館）

謝辞

本報告作成にあたり、この６年の振り返りを述べて頂いた作品ガイドスタッフ１期生の澤田俊輔氏、清水寿美子氏、永井國男氏、西山宏氏、松本ゆかり氏、安永愛子氏に、この場を借りまして厚く御礼申し上げます。